えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第129号
令和8年
(2026)
11 － 12

江戸東京博物館友の会会報

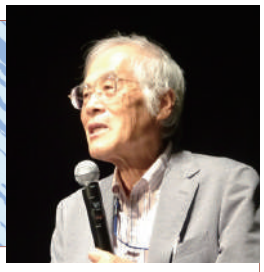
目次

藤森館長記念講演「日本の住宅の原点を求めて」……1～2
江戸博クリップ「リニューアルオープンから半年
―広報の舞台裏！」……2
第22回定期総会開催……3
友の会セミナー「羽柴秀長の生涯と実像」……4
特別展「豊臣兄弟！」観覧記……5
えど友広小路
サークルだより／翻刻だより／友の会めも……6
催事案内／会員優待のお知らせ……7～8

江戸東京博物館友の会　2026年度定期総会　記念講演（令和8年9月13日）

日本の住宅の原点を求めて

江戸東京博物館　藤森照信　館長



今日は「日本の住宅の歩み」の話をします。基本的なことから始めて、日本の住宅の元をたどると、どんなところへ行くかということです。基本的に日本の住宅の種類は数寄屋造り、茶室、書院造り、寝殿造りの四つしかありません。

寝殿造り

寝殿造りの代表が京都御所ですが、今の御所は江戸時代中期に復元されたものです。当時の面影を伝えているのは栂尾にある高山寺の石水院で、京都御所の建物を移築したといわれています。今日私たちが知っている和風住宅の障子や襖は後世のもので、寝殿造りにはありません。

柱の間の位置に柱が並んでいて、外側には「部戸」という跳ね上げる板戸があります。板戸の外には「濡れ縁」という縁側があり、内側には「庇」、さらに内側には「母屋」という場所があります。そのままでは寒くて住めないので、衝立を立てていました。当時の貴族は通い婚なので、男が訪れると畳を敷いて衝立で囲いました。寝る場所は2、3畳敷きの畳を敷き、周りを「塗り籠め」という壁で覆っていました。基本的に寒い中で我慢して暮らしていて、寝殿造りは住みにくいです。

▲寝殿造り（石水院）

書院造り

鎌倉時代になりますと武士が台頭してきますが、武士たちはそんな寒い家には住みたくありません。そこで造りだしたのが書院造りという形式です。これが今の伝統的な住宅の基本になります。

書院造りの基本は畳・障子・襖・天井で、初めて部屋ができます。畳が敷き詰められていると、寒さが和らぎます。寝殿造りでは特別な場所というものがありませんでしたが、部屋の中に「床の間」という特別な場所ができます。部屋の真ん中に座る主人の背中が床の間で、周りは障子で囲われ、外側に廊下と雨戸があります。雨戸ができたのは江戸時代初期です。

床の間は床・違い棚・付け書院の三つからできています。書院とは元々お坊さんが本を読んだところで、香炉・花・本などを棚に置いていました。もう一つ重要なのは柱の上の方に「長押」という横向きの板があることです。元は柱の間に入れる構造上の素材でしたが、次第に格式を示すものとなっていきます。

東京の書院造りの中で一番古くて格式のあるのが、湯島にある岩崎久彌邸の和館です。洋館はコンドルの設計で知られていますが、和館は「念仏喜十」こと大河喜十郎という有名な大工の棟梁が造ったものです。

▲書院造り（長州屋敷）

茶室

突然、安土桃山時代に千利休が茶室という形式を生み出します。利休の茶室がいかに奇妙なものであったかをこれから説明していきます。利休の茶室で残っているのは「待庵」一つだけです。淀川沿いの山崎に造られ、現在はお寺の中に移築されています。

どこが尋常ではないかというと、まず窓の竹ひごが細くて透けています。入り口の引き戸は雨戸を切ったもので、そこだけ敷居を付けています。中に入ると畳が2枚と床の間があり、窓の柱

は塗り籠めをして隠しています。これは「室床」という極めて異例な作りです。普通は付け壁にしてそこに絵を飾りますが、塗り壁のままです。また、通常は柱の間を障子にしますが、一部だけを明かり取りにしています。さらに、天井は民家にあるような竹を使ったもので、書院造りと民家の双方の形式を取り入れています。

もう一つの特徴は非常に狭いことですが、なぜこんな狭い茶室を秀吉のために造ったのでしょうか。おそらく信長や秀吉の造ってきた建築を見てきて、それとは反対のものがあることを示すためではないでしょうか。利休と同時代のレオナルド・ダ・ヴィンチの有名な人体図は建築のために描かれたものですが、これを実践したのが利休ではないかと思います。

▲茶室（待庵）

数寄屋造り

利休の茶室が元になって、書院造りから派生したのが数寄屋造りです。当時の建物は残っていませんが、横浜にある三渓園の臨春閣は江戸時代中期に造られたと考えられ、最も有名な数寄屋造りです。

数寄屋造りの特徴は形式張ったことはやめようということです。まず建築資材が細くなります。太い柱を細い柱にし、木も皮をむいた赤木を使うようになります。長押は半月状で、ちゃんとした長押にはなっていません。天井も野趣に富んでいて、立派ではありません。こうした自由な造形に満ちた遊びをするのが数寄屋造りです。

▲数寄屋造り（臨春閣）

縄文住居から茅葺き民家へ

これまで出てこなかったものに民家があります。民家の起源は弥生時代の高床式住居で、中国の南方から伝わったものです。

現在最古の民家と考えられている民家が兵庫県の六甲にあります。「箱木の千年家」と呼ばれている民家の原型です。屋根が茅葺きで、土壁で柱がありません。中は縄文時代の竪穴式住居のような天井です。

また、茅葺き民家の一部に奇妙なものが見られます。屋根のてっぺんに草が生えています。これは人為的に植えられたもので、「芝棟」と呼ばれています。この習慣は雪国を除く日本全国にありました。フランスのドーバー海峡近くの村にも同じ習慣が残っており、ユーラシア大陸の北半分にあったと思われます。

▲茅葺き民家

茅葺き屋根にした従来の縄文住居の復元は間違っています。石器で茅は切れませんので、鉄器ができる前は木の皮で屋根を葺いていました。現在の復元では、木の皮で葺いた上に土を乗せて、土が流れないように草を生やしています。竪穴は防寒のためで、なぜ土を掘るかというと、そのままだと表面の土が凍ってくるからです。凍結を防ぐためには基盤を１ｍぐらい掘らなければなりません。さらに屋根の上にも防寒のために土を乗せていたことが明らかになってきています。これが芝棟の原型です。芝棟が雪国にないのは、雪が積もるとそれが防寒になるからです。芝棟は縄文時代の記憶をとどめています。

▲復元縄文住居

縄文住居では竪穴の真ん中に炉があって暮らしていました。また屋根の垂木の上に土を乗せて草を植えていました。こうした草葺きの家が日本の住居の原型で、北方から伝わってきて、やがて茅葺きの家になっていきます。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸博クリップ

リニューアルオープンから半年 ―広報の舞台裏！

事業推進係　学芸員　小川綾子（おがわ　あやこ）

早いもので、リニューアルオープンから半年が経ちました。この半年間、江戸博の広報担当である事業推進係は、まさに怒涛の日々を過ごしてきました。４年ぶりの再開館ということもあり、途切れることなく寄せられる取材依頼に、うれしい悲鳴を上げながら対応してきました。現時点での取材件数は、すでに昨年度同時期の２倍を超えました。休館日や閉館後に取材を受けることも多く、１日に複数の取材対応を行うこともあります。江戸博には、国内外の幅広いメディアから取材依頼が寄せられます。旅や観光、歴史、建築、美術、教育など、そのジャンルは実にさまざまです。多くの媒体で江戸博の魅力を発信していただくことが、未来の来館者との新たな出会いにつながる。そう信じながら、今日も取材対応に励んでいます。

▲江戸東京博物館入口の光壁

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

第22回定期総会開催

新体制で本格スタート！

江戸東京博物館の大ホールにて、大規模改修による４年間の休会を経て、再開後、初となる定期総会を開催しました。

総会は９月13日(日)13時15分、おなじみの柏木静さんの司会で開会しました。はじめに川上由美子会長代行より、「この４年間、友の会が活動を途切れさせずに歩んでくることができたのは、会員の皆さま方のお力があったからこそと思っております。そして本日、総会を開くことができました。これからはリニューアルされた博物館の新たな魅力を皆さまと共に楽しみながら、学び交流する友の会らしい活動を続けていきたいと思っております」とのあいさつがありました。続いて江戸東京博物館から寄せられたごあいさつ(別掲)を川上会長代行が代読しました。

議長団の選出は事務局一任とされ、議長に中山和巳さん(事業部会)、書記に中村貞子さん(広報部会)と辻井桜さん(総務部会)が選出されました。中山議長より「本日の出席者数96人、委任状提出数329人、合計425人です。規約による定足数は、2026年８月時点の会員総数818人の３分の１(273人)であるため規定数に達しており、本総会は有効に成立いたしました」と宣言があり、議案の審議に入りました。

第１号議案「2022年４月～2026年６月まで 事業報告ならびに収支決算報告」

活動全般について川上会長代行より、各部会・プロジェクトの活動については川上事業部会長、菊池広報部会長、上野総務部会長、加藤館蔵古文書翻刻プロジェクトリーダー、川上休館対応プロジェクトリーダーより報告がありました。引き続き福田会計担当より収支報告、杉谷監事より活動および会計処理が適正である旨の監査報告がなされました。質疑はなく、議長が賛成の拍手を求め、出席者の大多数の賛成により原案通り承認されました。

第２号議案「2026年度事業計画案ならびに事業予算案」

今後の基本方針について川上会長代行より、部会活動計画案について前出の各部会長らより説明がありました。事業予算案については、福田会計担当より「前期繰越金の4,504,799円を4,590,731円に誤記訂正し、それに伴い次期繰越金を2,026,731円に訂正する」との修正を含めた説明がありました。質疑はなく、議長が賛成の拍手を求め、出席者の大多数の賛成により原案通り承認されました。

第３号議案「江戸東京博物館友の会規約の改訂」

川上会長代行より規約改訂の主旨説明がなされました。質疑応答では、会員特典を定めた規約第６条⑦「博物館の行う事業への優待」(えどはくカルチャーなどが該当)の削除について質問があり、川上会長代行より経緯が説明されました。議長が賛成の拍手を求め、出席者の大多数の賛成により原案通り承認されました。

第４号議案「役員および監事の選任」

川上会長代行より候補者選任の経過説明および役員候補者の氏名表記について一部誤記訂正する旨の報告がありました。質疑はなく、議長が賛成の拍手を求め、出席者の大多数の賛成により原案通り承認されました。

全議事の終了が宣言されたのち議長団が退場し、進行が司会者へと戻されました。最後に川上新会長より退任役員・監事への感謝とともに再任・新任役員・監事の紹介と挨拶があり、盛会のうちに定期総会は幕を閉じました。

定期総会に引き続いて、15時から記念講演会として会員以外の方も参加して、藤森館長に「日本の住宅の原点を求めて」について講演をしていただきました。

【取材】文：広報部会・前田太門
写真：同・中村貞子

▲新役員・監事の紹介

江戸博友の会 総会(9/13) ごあいさつ

江戸博友の会の皆さまには、日頃より、東京都江戸東京博物館の事業にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

当館は、2022(令和４)年４月１日から大規模改修工事のため４年間の長期休館をしていましたが、2026(令和８)年３月31日にリニューアルオープンいたしました。

工事期間中、皆さまには大変ご不便をおかけしておりましたが、この日を無事に迎えられましたのも、日頃より当館を応援いただいているたくさんの方々のご理解と多大なご協力の賜物と、深く感謝を申し上げます。休館している間にも、江戸東京の「アイコン」となることを目指し、他県や海外の博物館等での展覧会開催や移動博物館の実施、収蔵資料のデジタル化推進など、様々な取組を行い、広く当館を知っていただくことができました。

そして、リニューアルオープンに当たっては、江戸東京の歴史と文化の魅力を国内外のどなたでも楽しんだり学んだりしていただくため、魅力ある展示を行うとともに、デジタル技術の活用にも取り組みました。皆さまに「また訪れたい」と思っていただける施設となれるよう取り組んでまいりますので、今後ともご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

東京都江戸東京博物館

第216回　江戸東京博物館友の会セミナー（2026年7月25日）

羽柴秀長の生涯と実像

講師　柴　裕之さん（東洋大学・駒澤大学非常勤講師）

はじめに

2026年NHK大河ドラマ「豊臣兄弟！」の主人公である羽柴(豊臣)秀長とはどのような人物であったのでしょうか。その生涯における活動を確認しながら、秀長の実像を探りたいと思います。大河ドラマの制作にあたり、それまで秀長の研究としてまとめられたものはありませんでした。今回の講演では、この２年間における研究で明らかになった秀長像についてお話しします。

秀長の出生と幼名

生まれは尾張国中々村(愛知県名古屋市中村区)。父は織田大和守家に仕えた妙雲院殿、母は天瑞寺殿、同父母兄弟には兄の秀吉のほか、姉に瑞龍院殿(とも)、妹に南明院殿(旭)がいます。生年は天文9年(1540)で、幼名としては「小竹」が知られていますが、これはあだ名であり、幼名は不明です。

織田家への仕官と活躍

秀長が織田家の家臣となった具体的な時期は不明ですが、兄秀吉が織田家の一将として同時代史料上に姿を見せる永禄8年(1565)以前と推測されます。初名は「木下小一郎長秀」、その立場は信長の直臣で、秀吉に付属させられた政治的・軍事的配下である与力として活動しました。当初、秀吉と秀長は必ずしも一緒に行動していたわけではありませんでした。しかし、秀吉の近江国長浜領の支配が本格化していくなかで、秀吉の一門として活動を共にしていきます。そして、秀吉が中国地方の攻略を始めると、秀長は但馬竹田城代として政治・軍事の一翼を担いました。

本能寺の変後の政局から豊臣一門大名へ

本能寺の変後における政局は、清須会議を経てやがて織田信雄・羽柴秀吉と織田信孝・柴田勝家との対立という事態になり、最終的に天正11年(1583)の「賤ヶ岳合戦」へと至ります。このとき秀長は近江国田上山に陣取り、柴田軍の攻撃から羽柴方陣営を守り抜いたうえ、駆けつけた秀吉とともに反撃をおこない勝利に導きました。この勝利により、織田政権は当主信雄を秀吉が補佐し運営されましたが、信雄には天下人の意識がなく、この事態に秀吉は政局運営の主導者として、やがて天下人へと歩み始めます。

この秀吉の動きに、織田信雄は不満を持ち徳川家康に協力を求めました。その結果、天正12年に小牧・長久手合戦が勃発し、秀吉と信雄は天下人の地位をめぐり戦いました。そのなかで起きた局地戦の長久手の戦いで、徳川家康に敗れたものの、最終的に秀吉は勝利することになります。この間に、秀長はそれまでの実名「長秀」を「秀長」に改め、天下人である秀吉を支える弟としての立場を明確にしていきます。

小牧・長久手合戦での勝利で、秀吉は織田家に代わる天下人となりました。そのうえで、秀長は秀吉が織田家に代わる天下人であることを世間に示すために、織田信雄を説得し上洛させ、秀吉へ臣従を誓わせました。これにより、天下人秀吉を主宰者とした豊臣政権が成立したのです。

羽柴家一門衆筆頭としての活動と死去

豊臣政権において秀長は、羽柴家一門筆頭として、秀吉が「天下一統」事業を進めるなかで、秀吉とともに軍勢を率い、場合によっては秀吉に代わり軍勢を率いる大将として軍事討伐に従事し、終戦・占領後には該当地域の戦後処理と統治のための体制を整備する、「仕置」の実務を指揮しました。また、織田信雄、徳川家康、毛利輝元、長宗我部元親、大友宗麟・吉統父子、島津義久・義弘兄弟ら有力諸大名の「指南」(政治的後見役)を務め、関係維持に尽くしてきました。このように、豊臣政権は主宰者の秀吉と彼を支え政権運営を指揮する「一門筆頭の執政」秀長のもとで展開し、「天下一統」を実現させたのです。

しかし、その功労の裏での激務により、秀長は大病を患い、天正19年1月22日に死去、享年は52でした。葬儀で導師を務めた古渓宗陳は、秀長を「秀吉の信頼が篤く、文武両道で威張ることなく穏やかな人柄であり、戦場では軍勢を率い、世の中のあり方を問い続け、財をなした人物」と評しましたが、その通りの人物でした。秀長の死後、豊臣政権は太閤秀吉と秀長の立場を引き継いだ関白秀次のもとで運営され、「唐入り」の実施へと向かっていきます。

レポーターからひとこと

今回お話しした内容は、特別展「豊臣兄弟！」の図録のなかに詳しく書いてあります、と先生から補足がありました。会場からの「なぜ、秀長がこれまで研究されてこなかったのか」という質問に対し、「これまで、豊臣政権については秀吉の研究だけで十分だとされてきた」という説明に納得です。秀長の黒印の崩し字の読み方も講義のなかで教えていただきました。　　参加者75人。

【記録】文・写真：広報部会・福田徹

NHK 大河ドラマ特別展「豊臣兄弟！」観覧記

今年の NHK 大河ドラマ特別展は、大阪、名古屋と巡回し、最後に江戸東京博物館で開かれました。

「彼が長生きしていれば豊臣家の天下は安泰だった」とまで言わしめた豊臣秀長の目線で、戦国時代を描く物語です。本展ではあまり光の当たることがなかった秀長の人となりを、貴重な歴史資料から見ています。「内々の儀は利休、公儀の事は秀長」という秀長の言葉からは強い自負が感じられます。卓越した内政・外交手腕で時代を乗り切る秀長の姿は示唆に富むものです。

▲特別展入口付近

プロローグ　武と智の兄弟

兄・秀吉、弟・秀長、この兄弟が16世紀末の日本を大きく動かしました。前半生には不明な点も多いものの、信長に仕えた秀吉が頭角を現し秀長も兄を支えます。秀吉政権下では秀長は一門筆頭として活躍し秀吉を支えました。禅林寺所蔵の秀長・秀吉像が印象的でした。

▲豊臣秀長像・豊臣秀吉像

第１章　転戦の日々

秀長が歴史に姿を現すのは、天正２年(1574)の伊勢・長島一向一揆攻めにおいてでした。以後、秀吉とともに各地を転戦し、戦功を重ねていきます。本能寺の変後、山崎の戦い、賤ヶ岳の戦いでも秀吉を支えました。展示品の「賤ヶ岳合戦図屏風」を興味深く見られました。

第２章　天下一統

小牧・長久手の戦いでは織田信雄・徳川家康に苦戦しながらも最終的に臣従させました。紀州・四国・九州と続く戦いで、秀長は総大将や調整役として活躍しました。天正13年７月、秀吉は関白に就任して豊臣姓を称しました。秀長も大納言に任じられ、「大和大納言」と称されるに至りました。展示のハイライトともいうべきなのが、「御所参内・聚楽第行幸図屏風」ですが、なぜか天皇の乗る鳳輦より、秀吉の乗る牛車の方が大きく立派に見えました。

▲長久手合戦図屏風

▲御所参内・聚楽第行幸図屏風

第３章　大和入国

紀伊・和泉を得た秀長は、四国攻めの功により、さらに大和を与えられます。寺社勢力の強いこの地に入国すると、郡山城を本拠に城下町の再編を進め、商人の移住や座の停止を通じて都市基盤を築きました。長谷寺に寄進された釣灯籠には、秀長の息女三八(みや)女の名が刻まれていました。また、重要文化財の藤堂高虎像も展示されていました。

第４章　時の権力と美

織豊期は、芸術・芸能が大きく花開いた時代でした。秀吉は能や茶の湯に深く傾倒しました。秀長もまた能や茶の湯を通じて武将や奈良衆との交流を重ねます。こうした場を彩ったのが千利休や小堀遠州ら数奇者や職人たちの工芸品でした。展示品の秀吉が金春太夫に贈った能面小面や、秀吉から毛利輝元が拝領した唐織の能装束がとても豪華でした。

第５章　豊臣の落日

秀長は病に倒れ、天正19年にこの世を去ります。ほどなく千利休の切腹や愛児・鶴松の死が重なりました。やがて秀頼誕生により後継問題が再燃し、甥の秀次が排除されるなど体制は大きく動揺します。幼い秀頼が跡を継ぎますが徳川家との対立は深まり、大坂の陣が勃発し秀頼は自刃し豊臣家は断絶しました。秀長が死去する直前に出したとされる羽柴秀長黒印状は、花押ではなく黒印が捺されています。病に冒され自署もできなかったようです。秀吉の自筆遺言状案も興味深いものでした。本展には崩し字の書状がいくつも展示されていたので、読める人は一層楽しめたのではないでしょうか。

エピローグ　兄弟！ 再び

頂点に立つ秀吉と周囲をつなぐ存在として、秀長は大きな信頼を寄せられていました。秀長はかけがえのない右腕でした。本展の出口では、壺阪寺所蔵の秀長の寄木造の座像が見送ってくれました。

▲特別展出口付近

【取材】文：広報部会・福田徹
写真提供：特別展広報事務局

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

８月休会。

９月 15 日(火)中村文男さんの月番で、ひらい圓蔵亭にて、上方落語のDVD を鑑賞。「どうらんの幸助」と「始末の極意」。演者はいずれも三代目桂米朝(1925～2015)。1996 年に人間国宝認定、2009 年に演芸界初の文化勲章受章。現代の落語界を代表する一人。いずれも現実離れした話だが、落語らしく滑稽で、関西弁が醸し出す独特の雰囲気と相まって、楽しめる二席であった。参加者７人。

若干名の新入会員を募集中。連絡先は世話人・中村文男(080-6631-3712)

◆藩史研究会

８月休会。

９月 11 日(金)小笠原広樹さんが上野国伊勢崎藩(現群馬県伊勢崎市)の発表を行った。伊勢崎藩は上野国佐位郡・那波郡の属村 49 カ町村を領有した譜代小藩。天正 18 年(1590)徳川家康の関東入国とともに、那波郡を松平和泉守家乗が１万石に封じられた。慶長６年(1601)３千石の稲垣長茂が佐位郡の内１万石に加増されて、伊勢崎を居城と定め伊勢崎藩が成立。同年松平和泉守家乗は美濃国へ転封、武蔵国川越から酒井忠世が入封。元和２年(1616)稲垣長茂の嫡男重綱が１万石を加増され越後に移封され、伊勢崎領は前橋藩主酒井氏の領有となった。寛永 14 年(1637)前橋藩主酒井忠清の弟、忠能が佐位・那波・武蔵国榛沢の三郡の内、２万 2500 石を分与され、伊勢崎に入封したが、寛文２年(1662)信濃国に移封し、再び前橋領となった。延宝９年(1681)前橋藩主酒井忠挙の弟、忠寛が佐位・那波両郡の内、２万石を分与され入封。以降、９代 190 年余在封した。参加者７人。

◆古文書を読む会

８月 24 日(月)「酒井伴四郎日記」の万延元年(1860)５月 19 日～24 日の６日間。加納宿より望月宿まで。現代でも名勝になっている寝覚ノ床では浦島太郎が寝覚めとの伝説もあることを知った。道中の各所で相変わらず、柏餅、栗粉餅、粟餅また名物餅を毎日のように食べている。「徒然草」 の 181～187 段。乗馬にしろ、芸能にしろ、軽率な行動に走らず慎重であることが、結局、成就につながる。専門家と非専門家の比較において、いかに上手にみえる素人でもやはり下手な専門家にはかなわない。専門家は型に入って型を出ることを常に意識している。これはあらゆる人生万般に該当する。参加者５人。

９月 14 日(月)「酒井伴四郎日記」の万延元年(1860)５月 25 日～29 日の５日間。望月宿より板橋宿を経て 29 日紀州藩中屋敷相の馬場長屋に到着。道中では蓮根油揚、芋まんじゅう油揚、まんじゅう揚等の揚げ物を多く食し、生節、そうめんをつまみに酒の他、みりん酒も飲んでいる。到着後は早速、挨拶回り、知り合いの行来があり、その後、取り敢えず日常生活に必要な土瓶、火口、衣紋竹、行平等を購入した。また、幸便があったので、国許へ道中で買い求めた山椒魚、手紙を依頼している。「徒然草」の 188～189 段。人生において、当人の意思通りに実現できるものではない。期待したことが成就せず、思いがけないことが実現する。不定こそがまことである。参加者５人。

９月 28 日(月)「酒井伴四郎日記」の万延元年(1860)６月１日～４日の４日間。江戸到着後、色々、日常生活に必要な物を買い求め、また、挨拶回りをしながら、衣紋方である職務、小姓、御側衆への着付け、装束等の指導を始めた。また、屋敷内の舞台、奥のお座敷、御座の間も拝見した。部位は不明だが、腫れ物が出来たようだ。「徒然草」 の 190～194 段。辛辣な結婚否定、女性蔑視を述べている。女性と同棲する男に幻滅を感じ、家事をかいがしく取り締まる女性、育児に励む女性を興ざめと述べている。参加者６人。

◆日本の大道芸伝承会

８月、９月休会。

◆江戸を語る会

８月、９月休会。

◆道灌倶楽部

８月、９月休会。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『飯田家文書』　飛脚甚左衛門の帳簿

第 127 号に、甚左衛門は越後国と江戸を年数回往復したと書いたが、安政７年(３月 18 日万延に改元)は７回往復している。江戸へのルートは何通りかあるが、距離は約 280 km で、この距離を大体７泊８日で歩いている。およそ１日 35km の行程となる。さて、彼が運んだものは何であったか、往復とも一番多いものは手紙だが、荷物ももちろんある。内容の分かるものを挙げてみると、国元からは、ゼンマイ・かんぴょう・練り熊(キハダの樹皮から作った、熱冷ましの薬)・水飴などがあり、奉公先の子供を思う親の気持ちが感じられる。一方、江戸からは、お茶・砂糖・現金である。江戸時代の砂糖は貴重品で、庶民にはなかなか手に入らないイメージであったが意外である。そのほか、村人から頼まれた買物に化粧品(お白粉・鬢付け油・口紅)・書籍・薬(気応丸・実母散)・野菜の種(大根・ニンジン)があり、地方の飛脚が手紙の運搬のみならず、大都市間以外の物流の一端を担っていた様子もうかがえる。

友の会めも (開催日と人数)

令和８年８月～９月

◆役員会８月 11 日(火)９人。９月８日(火)９人。◆事業部会８月５日(水)10 人。９月８日(火)13 人。◆広報部会８月 18 日(火)５人。９月 15 日(火)７人。◆総務部会８月 18 日(火)11 人。９月 29 日(火)10 人。◆古文書講座 入門編：９月 19 日(土)午前 44 人・午後 42 人。初級編：９月 16 日(水)午前 45 人・午後 52 人。中級編：９月 25 日(金)46 人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト８月在宅作業Ａ班４人。Ｂ班５人。９月 17 日(木) Ｂ班２人、在宅作業３人。９月 24 日(木)Ａ班４人。

催事案内

友の会セミナー

江戸の飛脚―飛脚は何を運んだのか―

講師　巻島　隆さん(歴史研究者)

◆近年、地震・洪水・台風などの大災害に見舞われるニュースをテレビ、ラジオ、新聞などで目にする頻度が高くなった。天災に加えて人災の最たる戦争情報も。現代の我々は遥か世界の遠くで起きた災害発生でも数分・数時間単位という短時日で緊急情報に接することが可能となったが、江戸時代ははたしてどうだったのであろうか。江戸時代には日本国内の遠方で大規模の火災・地震・洪水などが発生すると、現地の飛脚問屋が情報をとりまとめて同じ仲間の飛脚問屋へと伝え、さらに得意先へと伝達した。手書きの場合もあれば、木版刷りにしてそれらを得意先へと撒く手段も取った。情報を受け取った得意先では情報内容を紙に大書して店先に張る場合もあった。地域社会の人々は店先に張り出された大書された情報を読み、例えば、親族の奉公先が大丈夫なのかどうか安否の目安ともした。情報内容は幕末期になると、天災(火災は人災だが)に加えて戦争に関するものが増えてくる。元治元年(1864)の蛤御門の変、慶応４年(1868)の鳥羽伏見の戦いに関するものである。物流の拠点だけでなく、情報に関して地域の拠点ともなった飛脚問屋。実際に荷物・手紙情報を担って街道を駆け抜けた飛脚たちの姿とは具体的にどのようなものであったのか。江戸日本橋で営業した飛脚問屋「京屋弥兵衛」「嶋屋佐右衛門」を中心に紹介する。

▲上州藤岡の嶋屋と京屋の図

◆講師略歴：まきしま・たかし

1966年、東京都生まれ。放送大学卒。群馬大学大学院で修士、高崎経済大学大学院で博士(学術)を取得。著書に『江戸の飛脚』(教育評論社2015年)『桐生新町の時代』(群馬出版センター2016年)『上州の飛脚』(みやま文庫)『飛脚は何を運んだのか』(ちくま新書2025年)。前橋市在住。自治体史編さん、古文書講座の講師など。

- 開催日：12月５日(土)14時～15時30分
- 申込受付開始：郵送11月１日、ネット11月10日
- 申込締切：郵送、ネットとも11月24日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館大ホール
- 定員：250人、同伴者可(氏名、電話番号連記)
- 参加費：会員1,000円、同伴・一般1,200円(当日払い)

【企画担当責任者】中山峰晴(事業部会)

見学会

恒例七福神巡り―下谷七福神―

◆新しい年の始まり、皆で七福神のご利益をいただきに出かけませんか。恒例七福神巡りも、回を重ねて６回目。今回は、下谷七福神です。七つの福を求め、江戸から昭和へと続く下谷の町の歴史を訪ねて歩きます。

◆今回のコースは、鶯谷駅を出発⇒元三島神社(寿老神)⇒入谷鬼子母神(福禄寿)⇒英信寺(大黒天)⇒法昌寺(毘沙門天)⇒弁天院(弁財天)⇒飛不動尊正宝院(恵比寿神)⇒寿永寺(布袋尊)⇒三ノ輪駅に到着、解散。約３時間の行程です。

◆それぞれの寺社には、七福神だけでなく、長い歴史と地域に根付いた様々な物語があります。元三島神社では愛媛の大三島から根岸へ移ってきた歴史、英信寺の大黒天は珍しい三面大黒天。その名から現代では航空安全の守護神となった飛不動や昭和の下町文化を伝える法昌寺の「たこ地蔵」等々。また七福神ではありませんが、平安時代の人物小野篁を祀る小野照崎神社にも立ち寄り、江戸庶民の信仰を集めた富士塚「下谷坂本富士」などもご覧いただきます。＊団体行動のためご朱印はご遠慮いただいています。

◆新年のひと時、ご一緒に福をいただく楽しい時を過ごしましょう。皆さまのご参加を心よりお待ちしています。

- 開催日：１月７日(木)　小雨決行、受付後順次出発
- 受付時間：12時15分～12時45分(時間厳守)
- 集合場所：JR山手線、京浜東北線鶯谷駅北口改札外
- 解散場所：地下鉄日比谷線三ノ輪駅
- 定員：100人(申込時会員外は、保険加入のため、住所・氏名・電話番号の連記が必要)
- 参加費：会員1,000円、会員外1,200円(当日払い)
- 申込受付開始：郵送：10月１日　ネット：12月６日
- 申込締切：郵送・ネットとも12月20日(日)必着

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

▲元三島神社　寿老神

▲入谷鬼子母神　福禄寿

[催事の申込方法]　催事に参加ご希望の方へ

はがきでのお申し込み

会報『えど友』の催事案内をご覧になり、以下の要領で、はがきでお申し込みください。

◆通常はがき（85円）に、

①催事名（略名可）と開催日　②会員番号（必須）
③氏名　④電話番号を明記

＊同伴者は、氏名、電話番号を連記。見学会のみ保険加入のために同伴者の住所も必要です。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館「友の会事務局」

◆セミナー、見学会の申込は１通で複数の催事申し込みも可です。古文書講座は、古文書講座だけでお申し込みください。講座の複数申し込みは可です。

◆セミナー、見学会の参加者には、締切数日後に「参加のご案内」を一斉にお送りします。それまでお待ちください。

◉WEBでのお申し込み

催事案内ホームページで、会報『えど友』やネットの催事案内をご覧になり、WEB経由、申込フォームからお申し込みください。

◆メールアドレスを登録されている方には：

催事案内がホームページに掲載された時、一斉メールを発信してお知らせいたします。

また、WEBによる申込受付の開始時に、メール一斉発信で申込フォームのURLなどをお知らせ致します。

◆参加者には締切後、メールで「参加のご案内」をお送りします。

◉共通事項

●応募者多数の場合は抽選となる場合がありますのでご了承ください。

●催事参加の際は本人確認のため会員証をお持ちください。

●友の会への連絡・問い合わせ先

電話の場合：０８０−７５９９−３３００
火曜日・金曜日
10時〜12時・13時〜17時
（この曜日、時間以外は不在になります）

はがきの場合：〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館友の会

メールの場合：　edotomo2001@gmail.com

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●江戸東京博物館リニューアル記念特別展
NHK大河ドラマ特別展「豊臣兄弟！」

会　期：９月15日(火)〜11月８日(日)
会　員：一般1,050円、高・中・小学生無料
同伴者：一般1,680円、高・中・小学生無料
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●江戸東京博物館リニューアル記念特別展
「円山応挙　リアルの先へ 空間革命」

会　期：11月28日(土)〜１月24日(日)

企画展のご案内

●「日米交流　知のかけはし ―ラトガース・カレッジと幕末明治の日本人留学生―」

会　期：10月24日(土)〜12月６日(日)
会　場：常設展示室内 ５階企画展示室

次回予告

●「徳川将軍家の幕末・明治 ―天璋院篤姫とその時代」

会　期：１月２日(土)〜２月14日(日)
会　場：常設展示室内 ５階企画展示室

休館日

11月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

広報部会員募集中

会報『えど友』を一緒に作りませんか？

セミナーや見学会の取材・撮影、独自企画の執筆など、ご自身の都合に合わせて得意なことで参加できます。ホームページ担当も同時募集！「できる時、できる事を」モットーに、楽しく活動しています。

まずはメールでお問い合わせください。

edotomo2001@gmail.com

会報＜えど友＞第129号
令和８年11月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edotomo2001@gmail.com

発行人：川上由美子(会長)　編集長：菊池真一
中村貞子、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、光田憲雄、横島利明、福田　徹、秋元康良、前田卓雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１　電話080-7599-3300